

「1点の格差の是正を」



受験指導で偏差値を考えたのは、子どもを実力に見合った希望通りの高校に合格させるためだったんです。

昭和30年ごろ、東京都の中学で理科教師をやっていました。受験指導といっても、単純に試験の点数を足して順位をつけるだけで、生徒が取っ

中学の理科教師時代に
偏差値を考案した

桑田 昭三さん(81)

た「1点」が科学的に分析されていなかった。例えば、平均点が70点の国語の70点も、平均点40点の数学の70点も、同じように扱われていた。

だから、平均点からどれだけ自分の得点が離れているかを示す偏差値という指標を考え、試験の中身を科学的に分析しようとした。偏差値の活用で「1点」への評価の格差は少なくなっただけだと思います。

ただ、1980年代になつてから、偏差値の値がその子どもの存在意義のように独り

歩きするようになった。手段じゃなく目的になった。「偏差値教育」の反省から導入された共通一次でも、「1点の格差」は是正されていない。

人生を振り返って思うのは、理想的なテストというものはない、ということなんです。

テストは得点を比べるので、「考える」ことではなく、「覚える」ことに重点が置かれる。考え方のプロセスは数値化できないからです。

ただ、ひとを選抜していくテストというものを科学的に分析し、改良しつづけない国は、国際的に後れをとっていくことは確かです。

証言